第2節　小串構内の立会調査

1　医学部附属病院外来診療棟新営に伴う立会調査

調査地区　　医学部附属病院構内

調査期間　　昭和61年5月20・26日、6月20・27日、7月24日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約5㎡

調査結果　　昭和60年度、この外来診療棟新営に先立った試掘調査を実施しており[1]、遺構は検出されなかったが、土師質土器・瓦質土器・国産陶磁器が出土し、小串構内東半部に遺物を包含する青黄橙色粘質土が堆積することを確かめた。しかし小串構内では、調査時の安全管理上から同層の下面付近までしか掘削しておらず、それ以下の土層の堆積状況は不明であった。幸い今回、当該建物の新営工事が、現地表から約10mにも及ぶ掘削を伴うため、連続的に堆積層を観察する機会が得られ、5地点を選定して立会調査を実施した。

各地点の基本層序はほぼ同一である。現地表から1.9～2.5mまでは構内造成時の埋め土で、その下に旧耕作土が残存する。旧耕作土の下には、遺物を包含する青黄橙色粘質土が厚さ20～30cmにわたって堆積しているが、今回の調査では遺物は出土していない。

それ以下は、青灰色粘土（厚さ約30cm）、粒子径の異なる砂層（厚さ2.1～2.5m）と続く。砂層は、基幹整備に伴う試掘調査で、幼貝を混じえた貝殻を含み、少なくとも1mの厚さをもつことがわかっていたが[2]、今回の調査でその堆積厚が確かめられた。また、その下には当地が一時期海であった際の基盤であると思われる、厚さ約4mにも及ぶ硬くしまった暗灰色砂質粘土（砂岩風化土）、石炭を含む頁岩の岩盤が認められた。　　（河　村）

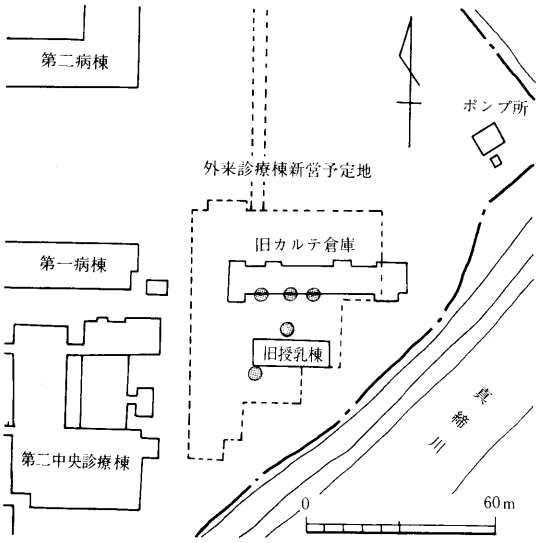

Fig. 50　調査区位置図

〔注〕
1）山口大学埋蔵文化財資料館「小串構内医学部外来診療棟新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。
2）山口大学埋蔵文化財資料館「宇部（小串構内）医学部基幹整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、1985年）。

2　医学部附属病院外来診療棟周辺環境整備等に伴う立会調査

調査地区　　医学部附属病院構内

調査期間　　昭和62年３月24日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　計約18㎡

調査結果　　工事は、外来診療棟周辺の植栽と、雨水管および雨水桝の埋設である。

植栽工事は、外来診療棟竣工後にロータリーとして活用される、短期大学部講義棟と外来診療棟との間で主に実施されるもので、掘削深度は樹種により異なるが、最深部で現地表から１ｍまでである。しかし、外来診療棟予定地部分の調査で、遺物を包含する堆積層は現地表から1.2ｍ下位で検出されていることから、[1]植栽工事は調査対象から除外した。

雨水管の埋設工事は、外来診療棟の南端部から旧カルテ倉庫東端部を経てＡ地点への管路が予定され、その間に９ヵ所の雨水桝を取設するものである。旧カルテ倉庫以南は外来診療棟新営に伴う立会調査（本節前項参照）で地下の状況を十分に把握したため、工事に伴う調査は行なわず、未調査地域として残っている管路北端部の、雨水桝を取設する２地点について立会調査を実施した。工事による掘削は現地表から約2.2ｍまでである。

Ａ地点では厚さ90㎝の構内造成時の埋め土の下位に旧耕作土・床土が残存する。その下に遺物は出土しなかったものの層厚20㎝の青黄橙色粘質土が堆積し、以下青灰色粘土、青灰色砂混じり粘土と続く。工事基底面まで掘り下げたが、砂層は検出されなかった。Ｂ地点は埋め土の厚さ80㎝で、その直下に青黄橙色粘質土が堆積しているが、湧水が激しく掘削を断念した。Ａ・Ｂ両地点とも基本層序は外来診療棟予定地部分と大差ないものであった。

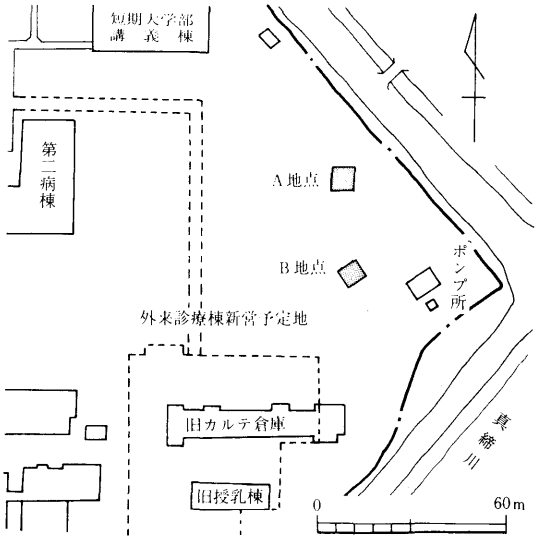

Fig. 51　調査区位置図

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「小串構内医学部外来診療棟新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。